祭詞雜稿

上

特35
781

255
288

014057−001−1

特35−781

祭詞雜稿

安部　喜三郎／編

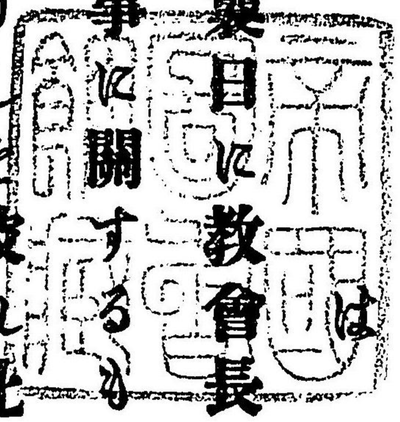
1冊（上61丁）

M42−43

ABB−0312

特35
781

しかはき



曩日に教會長諸氏か切なる需に因り祭典の神事に關するものゝみにて予か此れまて用ゐたりしを彼れ此れ蒐輯め祝詞雜稿と題して頒ちたりしか今回又葬儀靈祭の詞をも蒐輯めもてゆきしに上下二卷となりぬれは前のに準ひ祭詞雜稿と題して印刷に附しぬ素より淺學不才文中字句の備はらさる所も多く精神の缺けた

明治
43.10.7
白木

正誤

正	誤
二丁裏六行 過犯せる	過犯せる
五丁裏行 彌列々に	彌列々に
以下之れに準ず	
六丁裏一行 親族家族	親族家族
以下之れに準ず	
十丁表四行 日夜知らに哭悲み	日夜知らに器悲み
十一表七行 限りと	限りと
十三丁裏四行 木の下露の	木の下露の
十六丁表八行 恙む事なく	恙む事なく
廿四丁表二行 遠近の	遠近の
廿五丁裏八行 世の爲	世の爲め
廿八丁表二行 殆	殆と
以下之れに準ず	

正誤

正	誤
廿八丁表二行 悔しみ	惜しみ
廿丁表二行 云ふべし	云ふべし
廿一丁裏六行 裁縫	裁縫
廿二丁裏二行 羸弱	羸弱
廿四丁裏二行 條々を	條々を
廿七丁表二行 涙を拂ひつゝ	涙と拂ひつゝ
同裏四行 豐州に九州に	豐洲に九洲に
同六行 給ひぬ	給ひ
廿九丁裏一行 田副	田副
四十一丁表二行 建びに建び	建びに建び
四十二丁裏六行 建びに建びて	建びと建びて
四十四丁裏六行 彈丸に	彈丸の
四十五丁表二行 涼しめ	涼しめ

正誤

正	誤
四十五丁裏三行五行 富岡	富岡
四十六丁裏八行 善行証書	善行証書
四十八丁裏二行 建び	建び
四十九丁裏一行 中りて	中りて、
同裏二行 泥濘ナル荒原ヲ	泥濘なる荒原を
同六行 大會戰	大海戰
五十三丁表六行 其効驗も	其効驗も
同三行 極み	極み
五十三丁裏六行 惜みて	惜みて
五十四丁裏八行 白さく	白さく
同一行裏 給ひしより	給ひしよ
五十九丁表五行 贈權中講義三宅	贈權中講義三宅
六十丁裏一行 給ひしかば	給ひしかは

るものも亦尠なからしされと要は唯初學者が參考の一助にも供することを得は幸とするのみ

明治四十二年九月

編者識す

目次

文例の部

歸幽奏上式祝詞　一丁
地鎭祭祝詞　一丁
祓詞　二丁
遷靈詞　二丁
同（小兒）　三丁
鎭祭詞　三丁
同（小兒）　四丁
終祭詞　五丁
同（小兒）　六丁
葬場祭詞　七丁
葬場祭詞（小兒）　八丁
誄辭　八丁
葬後靈祭詞　十丁
十日靈祭詞　十丁
同墓參詞　十一丁
五十日靈祭詞　十一丁
祖靈舍合祀祭詞　十二丁
百日靈祭詞　十三丁

實例の部

大橋時五郎老翁遷靈詞　十四丁
同鎭祭詞　十五丁
遠藤治郎吉老翁終祭詞　十五丁
秋山熊吉彦同　十六丁

森大輔彦終祭詞　十八丁
高宮教會長堤清四郎大人同　二十丁
同　葬場祭詞　二十二丁
藤井岩野姫終祭詞　二十六丁
同　葬場祭詞　二十七丁
大岸幾志姫終祭詞　二十八丁
同　葬場祭詞　三十丁
久山氏妻今井末須姫同　三十一丁
大講義仁科松太郎大人同　三十三丁
岡本敬次郎童男同　三十六丁
須々木健次郎彦同　三十七丁
陸軍歩兵少尉田副鎭助君同　三十八丁
陸軍歩兵軍曹富岡長造彦終祭詞　四十四丁
陸軍歩兵軍曹富岡長造彦葬場祭詞　四十五丁
陸軍砲兵助卒川上鉄太郎彦同　四十八丁
金光中學校教員山田友藏弔慰祭詞　五十一丁
陸軍歩兵上等兵西牧善四郎葬祭弔詞　五十二丁
陸軍歩兵上等兵唐川德平同　五十四丁
川之江教會長高橋常藏大人十日靈祭詞　五十五丁
土堂小教會長藤井吉兵衛大人同墓參詞　五十七丁
贈訓導長田眞幸彦三十日靈祭詞　五十八丁
新見教會長三宅信吉彦五十日同　五十九丁
大倉和平太若子百日同　六十一丁

目次終

祭詞雜稿上

文例の部

歸幽奏上式祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名姓名」畏み畏みも白さく大神の廣く厚き恩賴を蒙りし「姓名」い病の苦瀨に落ちて苦しみたりしが遂に得堪へで今日を現世の限りと幽冥に歸きぬれば現身

の世に在經し間に過犯しけむ罪事の有らむを
ば神直びに直し神許しに許し給ひて其靈を廣
く愛で給ひ厚く惠み給ひて彌廣に廣き所を得
しめ給ひ彌高に高き神の位にも進ましめ給へ
と乞祈奉る禮代の御酒御饌を平らけく安らけ
く聞こし食せと畏み畏みも白す

地鎮祭祝詞（新らしく墓地を設けたる時祭事を行ひ奏上する詞なり）

此の所を掃ひ清め神籬立てゝ招ぎ奉り坐せ奉
る掛巻も畏き天地金乃神教祖金光大神の御前
に畏み畏みも白さく此の所を「姓名」の奥城所と
土掻平らし注連縄引廻らし界を限りて造り定
むる狀を聞こし食し諾ひ給ひて今より後此奥
城の崩損ふ事なく永く遠く幸へ給へと忌み清
まはりて献る禮自の御酒御饌を平らけく安ら
けく聞こし食せと鵜自物頸根突拔きて畏み畏
みも白す

祓詞

掛巻も畏き祓戸大神等の御前遙に畏み畏みも白さく今日はも「姓名」い身退りぬるを以て其が葬儀執行はむとす故れ式の隨祓の式仕へ奉り靈璽を始めて靈床をも祓ひ清め又今日の祭事仕ふる諸人の過犯せる罪事の有らむをば祓ひ給ひ清め給へと畏み畏みも白す

遷靈詞

「姓名」翁（翁は只例を示しゝものなれば實地に就きては彦、姫、老叟、刀自、等其區別に從ひて書すべし以下同し）の靈の前に白さく「翁」はや惜らしくも身退まし〻ぬるかも愛しけくも此世を去りまし〻ぬるかも「姓名」齋主として葬儀仕へ奉らむと今遷靈の式以て遷し奉る隨此の靈璽に移り留り坐せと白す

同（小兒）

「姓名若子」少女や現世に生出で〻後は甚健に生立しが如何なる枉事にや病氣發り卒然に重り

行きて垂乳根の父母、親族等の心盡しもそのかひなくて遂に歸らぬ道に向ひまじゝは爲む術もなき事になも故れ葬儀執行むとして今靈璽に御靈を招移し奉らくを平らけく聞こし食して速に移り鎭りませと白す

鎭祭詞

「姓名」翁の御靈に白さく汝「翁」や思の外に身失せ給ひ此現世を退り坐しぬれば親族家族諸は愁ひ悲み悔み歎きつれど限りある人の力以ては如何とも爲む術もなき事にぞありける然れば人皆の思の及ばむ限は心盡して療し治めしも遂に命の終ては是れ定れる現身一世の涯り靈の幽冥に復るべき期到りぬる事と思ひ定めて一向に御靈の爲に祭事仕へ奉るべきものにこそ故れ汝靈を「諡號」と稱へ奉りて此れの靈舍に齋ひ鎭め奉れば子孫の遠き世の守り此家の永

き鎭と長しへに留り坐せと御酒御饌種々の物を供へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食せと白す

同　（小兒）

「姓名」若子（少女）の靈や齋主「某」が告白す事を甘らに聞こし食せ汝「若子」（少女）はや汝は未た甚幼く世の理は知りまさずてありけむも現身の人の魂は天地の大神の授け給へるものにして此現世に生出で其命の長きと短きとの別こそあれ死りては幽冥の御掟の隨神の位に鎭るべきなり故今かく御靈を鎭め奉らくを平らけく聞こし食して一向に遠祖等の靈神に依り從ひ教祖の大神の愛撫を蒙りつゝ遠永に鎭りませと机代の御酒御饌種々の物捧げ奉らくを聞こし食せと白す

終祭詞

「姓名」の御靈の前に白さく親族家族の人等の心には如此ながら何日までも御前の事仕へ奉らむと思ふものから現世の慣と限りしあれば今日はも葬儀執行はむとして種々の裝束物設整へ捧げ持つ旗手の彌列々に親族家族を始めて相識れる遠近の人等が柩の後先も繁らに伊群列り御供仕へ奉らくを甘らに安らに聞こし食し諾ひ給ひて退り坐さむ道の八十隈恙む事なく滯る事なく後も安けく出立坐せと白す

同　（小　兒）

「姓名若子」（少女）の柩の前に白さく阿波禮「若子」（少女）や先頃より苦瀨に落ちて苦みましければ親族家族諸は一向に大神に乞祈奉り醫師に請ひて種々に心を盡しゝかども未か弱き身にして重き病に拘らひましゝかば遂に得耐まさで盛待つ間の花の露敢なく消て失せましゝは甚惜

らしき極になも然れは垂乳根の親等親族家族は最も飽ず悔しみ云む術爲む術知らに思惑ひて亡骸をだに今暫留め置まく欲すれど現世の慣と限有るゞ上に一度其躰を離れし靈の再還らぬを如何にせむ故れ親族家族諸哭き悲しみ歎きつゝ葬具設整へ今しも御墓所に送り奉らむ終祭仕へ奉り禮自の物と御酒御饌種々の物供へ奉る狀を平らけく聞こし食して御心も安けく出立ち坐せと白す

葬場祭詞

是の葬場に暫舁据安むる「姓名翁」の柩の前に白さく汝「翁」はも思ほえず不平み坐しければ親族家族諸種々に心を盡し思を凝らし伊々可々傳々今一度は美はしき元つ御形をも見物語をも爲むものぞと乞祈仰き待ちつるかひもなく何とかも惜らしき此世を背かひになして歸らぬ

方には向ひましつる故れ親族家族諸言む術爲む術知らに憂ひ悲しみ歎きつれども限ある人の力以ては爭む術もなく止むる由もなし阿々波々禮々今は只其靈の行方を大神に乞祈奉り亡骸は式の隨廣く厚く治め奉り此奥城の底津岩根に深く堅く埋め奉り拜み奉る狀を靈ながらに平らけく聞こし食して是の所を常世の住所と安く穩に鎭りませと白す

同（小兒）

是の葬の場に舁据安むる「姓名若子」（少女）の柩の前に白さく阿波禮悲しきかも阿波禮波加なきかも病の苦瀨に落ちては貴きも賤きも老たるも若きも其差別なく遂に其命の終の時となりては又如何にとも爲む術なし阿波禮汝「若子」（少女）や俄に病重りて「何才」を此世の限りともろく消失ましぬれば親族家族諸は悲み惜み歎か

ひつれど斯く身退ては幽冥の一道に向ふ外なけれは今日葬儀として種々の物持ち連並め今道の隈々恙事なく送り參來て是の奥城所に収め奉らむと御酒御饌種々の机代物を捧げ奉らくを聞こし食し諾ひまして下津岩垣動きなく安く穩に鎭りませと白す

誄辭

阿波禮汝「翁」や何て現世を捐て幽冥には隱り坐しぬらむ阿奈悲きかも阿奈悔きかも此悲は月日立ちぬとも薄らがし此悔は歳經ぬとも忘れし今よりは誰と共にか事をも爲まし阿奈悲し阿奈悔し阿波禮汝「翁」や百年の齡をも重ねまさむ事を乞祈奉りし心にこそは最も飽ず所思れ然すがに現世に立置給ひし功績の並ならず坐しぬれば教祖の大神の廣く厚き御惠を蒙り給ひて靈の位も然こそは高く進み坐すらめ然こ

そは穩に神鎭り坐すらめ然はあれども明日よりは慕しき御形は見えずやなりなむ今よりは懇なる御言は聞えずやなりなむと言む術爲む術知らに思ひ惑ひつゝ今日はも葬式仕へ奉らむと親族諸此の御前に來入集ひぬ故れ兩と降る袖の涙を搔拂ひ雲と立つ歎息の眞中に呻吟ひつゝ「長男某」悲み悲みも思ふ心の千々の一言誄び奉らくと白す

葬後靈祭詞

「諡號」の靈神の前に白さく汝はも不意く幽冥に罷坐しぬる事は甚も惜しく甚も悔しく親族家族等は日夜知らに器悲み歎き呻吟ぬれど留む べき由もなく遮るべき術もなければ結ぼれた る心を鎭めて今日はも葬儀執行ひ收め奉り事竟へぬ故れ家内に齋ひ奉る御靈を慰め奉らむと御祭仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし

食し諾ひ坐して子孫の末遠永く守り惠み幸へ坐せと白す

十日靈祭詞

「諡號」之靈神の前に白さく汝翁はも百年の齡を重ねて世の長人と名に負坐さむ事をこそ常に思ひ賴みて有りしが阿波禮波加なくも幽冥に罷り坐しぬれば親族家族諸は言む術爲む術知らに歎き悲み夜となく晝となく悔み惜みつつ在る間に今日は早十日と云ふ日になりぬ故式の隨御祭仕へ奉らむとして御酒御饌種々の味物を御前に置足はし供へ奉らくを甘らに安らに聞こし召せと白す

同墓參詞

「姓名」の奥城の御前に白さく阿波禮汝翁の今を限りと此の現世を離りて加曾けき幽冥に歸き坐しゝよりいつしか日數の來經逝きて今日は

早十日の御祭仕へ奉ると靈主の御前を齋ひ奉り治め奉りて已に其式竟ぬれば此れの御前を拜み奉らむとして今かく親族家族諸を牽ゐ連並め各瑞の玉串捧け奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ坐せと白す

五十日祭詞

「諡號」之靈神の前に白さく日波は流るゝ如く月波は走り行く如く十日二十日は昔と過ぎ三十日四十日は昨日と避りて今日はも汝「翁」の身退ましゝより百足らす五十日と云ふ日に成りぬ阿波禮波加なくも現身の此世をば退りましぬれど其の靈は常しへに消ねず失せず皆本つ幽冥に還りて負々那々生涯の行狀に依り神の御掟に從ひ教祖の神の愛の隨其御蔭に隱ろひ神の位に鎭り坐すべきものなれば此れの靈璽に留り坐せる御靈はし遠永に家の守と子孫の八

十續きに惠み幸へ給へと今日の御祭に供へ奉る御饗の御酒御饌を平らけく安らけく聞こし食し諾ひ御心穩ひに鎭り坐せと白す

祖靈舍合祀祭詞

此れの靈舍に齋ひ奉り鎭め奉る「姓」の家の遠祖世代祖等親族之靈神等の御前に白さく汝靈神等の子孫「某」身退坐してより來經行く月日の多由多布事なく早くも五十日と云ふ日になりぬ故れ今日はも遠祖世代祖等の靈神の鎭りませる此靈舍に合祀座奉らくを相共に諾ひ給ひて禮代と奉る御酒御饌種々の味物を平らけく安らけく相嘗に聞こし食して家の內外に災なく親族諸睦び和ぎ子孫の八十續き嚴し彌木榮の如立榮にしめ春秋の御祭をも絕る事なく怠る事なく仕へ奉らしめ給へと白す

百日靈祭詞

是の小床に鎭め奉り座せ奉る「諡號」之靈神の前に白さく阿波禮汝翁はや現身の此世を退り坐しゝより今も尙繁き思は杜の大木の千枝に五百枝に隙なきが如く絶ねぬ泪は木の下露の朝夕に乾かぬが如く百日と計ふる今日までも忘れ難に忍び奉りて此の御前を拜み仕へ奉らくを靈もさこそは知食すらめかく知食さば今日捧げ奉る禮代の御饗をも聞こし食し諾ひ給ひて今は教祖の神の御許に鎭り坐す御靈の幸以て子孫を嚴し彌木榮なす立榮えしめ給へと乞祈齋ひ拜み奉らくと白す

實例の部

大橋時五郎老翁遷靈詞

大橋時五郎老翁の靈の前に權少講義安部喜三郎告白さく汝翁はも現身の世の理の病に拘らひて此れの六月の四日を息の涯として此現世

には別れ坐しぬ阿那悲しきかも阿那悔しきかも然はあれど其の靈はしも我大神の授け給へるものなれば死りては本の幽冥に歸り天地の神の御許に參昇り教祖の神の廣き御惠を蒙りつゝ子孫を八十續きに立榮ゆべく佐け幸へますべきものぞ故今ゆ後御祭仕へ奉り親族家族諸が拜み奉らむ標と靈璽を造り備へて遷靈の式仕へ奉らくを平らけく聞こし食して速けく移り鎭り坐せと白す

同鎭祭詞

阿波禮大橋時五郎老翁の靈の前に白さく汝翁はや惜らしくも身失ましぬれば御靈の行方を治め給ひ撫み給はむ事を我大神に乞祈奉りてかく齋ひ奉らくを甘らに安らに聞こし食し給ひて此れの家の守神と遠永に鎭りませと御酒御饌種々の物を捧げ置きて謹み敬ひも白す

贈訓導遠藤治郎吉翁終祭詞

贈訓導遠藤治郎吉翁の柩の前に權中講義安部喜三郎告白さく汝翁や波加なくも退りましつるかも都禮もなく隱れましつるかも親族家族等の心には甚も飽ず思偲び夜は夜の明る極み晝は日の暮るゝまで悲泣み臥轉び匍匐ひ悔み空しき御體を見れば猶おはするものと思惑ひ歎かひつれと世の慣と限りし有れば例の隨裝飾物設備へ今日はも葬儀治奉らむと親族等打集ひ各玉串捧げ持ち誄辭竟へ奉らくを聞こし食し諾ひまして本つ靈は我大神の御許近く參昇り教祖の神の廣き御蔭に隱ろひて限なき歡樂を得給ひつゝ家の子等を永く遠く守り給ひ惠み給へと種々の味物を供へ奉り齋ひ白す事の狀を平らけく聞こし食して罷り坐さむ道の八十隈恙む事なく障る事なく後も輕く御心も

穏に出立坐せと白す

秋山熊吉彦終祭詞

阿波禮秋山熊吉彦の靈の前に權中講義安部喜三郎告白さく汝彦はも其性質素より忠實にして能く父母に孝順ひ稚き時より美術の事を好みましける中成人りては彫刻の術を學ばむと志し其道に秀でたる正阿彌勝義に從ひ年ねく心を盡して遂に其の蘊奥をも極め給ひ今は遠近に其名も聞えたる有功人にぞ坐しける然るに去年の極月の晦日の夜俄かに病臥し坐しければ親族家族諸は大神に乞祈奉り醫師に請ひつゝ種々に心を盡しゝかども御命の限にや昨日の午前十一時になも春雪の消ゆるが如く隱れ去ましゝは啻に家の爲のみならず皇國の御爲に惜しとも惜し悲しとも悲しと云ふべし斯れば前に告奉りし如秋山熊吉彦之靈神と謚

號を負せ奉り今しも終祭仕へ奉らむとして御酒御饌種々の味物を供へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食せと白す斯て是より彦が入立ち坐さむ幽冥はしも我教祖の大神の鎭り坐す所なれば唯一途に伊行到りませ然到りましなば汝が平日の行狀と功績とを賞給ひ愛給ひて正しき神の列に入り給ひ教祖の大神の御愛の隨永く久しく幸を得給ひつゝ靈舍に鎭め奉り

し汝が分靈と共に家の守神と坐して內外の患もなく子孫の八十續まで守り惠み立榮えしめ給へと白す

辭別て白さく出立せ奉らむ行粧整ひぬれば今より奥城所に導き奉らむとする狀を聞こし食し諾ひ給ひて御心も安けく出立ち坐せと白す

森大輔彦終祭詞

思へば悲しく言へば息衝しき森大輔彦の柩の

前に少教正安部喜三郎告白さく阿波禮汝彦の爲に今日葬儀を行ひ御祭仕へ奉らむとは木綿襷掛ても思ひ渡らざりき汝が葬詞を今父母の君に聞かせ奉らむとは夢にだも思ひ量らざりき阿波禮汝彦はも此の四月の十七日の夜中も近き頃卒然に病發りて惱みましければ其事よ此事よと立走り其所よ彼所よと按摩りつゝ呻吟ふ間に昏絶りまして喚べと叫べと御答さへも爲給はず四十三歳を此世の限として幽冥に退り坐しゝは惜しとも惜しく悲しとも悲しと云ふべし阿波禮汝彦はも未た盛の齡にて末遠き春秋を殘してかく身退り給ひけるかと今更に心も亂れ涙も放れて留め難きを暫忍ぴて現世に坐しゝ間の事蹟を言擧げ稱へて忍び奉らむ汝彦はも赤磐郡高陽村本波善五郎主の長男と生出で坐しける此れの森の家に養子とな

りては能く養父母に仕へ弟妹に睦び家業を輔けつゝ有しに明治三十年の三月岡山縣属に任けられ第四課勤務となり同じ三十一年の五月には赤磐郡書記となり第三課勤務を命ぜられ其の四十年九月には復岡山縣属に任けられし同じ四十二年の四月に七級俸に進められ給ひ又三十九年の四月には明治三十七八年事件の功に依り賞勳局より金六拾圓を授り又今回

病氣の爲め官職を辭り坐しゝに依りては一時金百八拾圓をぞ賜りたりける斯く現世に坐して官職の爲に心を盡し許多の功績を立置き給ひしかば我大神も賞給ひ撫み給ひて幽冥に復れる後の御靈は廣く厚く惠み給ひて高く尊き神の位に上り教祖の大神の廣き御蔭に隱ろひて安く樂しく長しへに鎭り給ひなむされば今ゆ後現世に殘れる妻子等の身に病しく煩しき

事なく護り給ひ幸へ給へと奉る机代物を平らけく安らけく聞こし食せと白す

辭別て白さく出立せ奉らむ裝束物も整ひぬれば今より奥城所に送り奉らむと導き奉らくを聞こし食し諾ひ給ひて御心も穩に出立ち坐せと白す

高宮教會長堤清四郎終祭詞

贈權大講義堤清四郎大人の柩の前に大講義安部喜三郎告白さく汝大人はや不意く病の兆ありしが漸に御心氣重り行きて去し五月の八日より全く病の床に打臥し坐しゝかば親族家族諸は一向に大神に乞祈奉り日に異に御病は怠り朝夕に御心氣は爽やき一度は美しき元つ御躰と成して物語ひ爲むと待ちつゝ樂みてありしに斯く思の外に身失せ給ひ此の現世を離りて幽冥に罷り坐しぬる事よ阿奈悲しきかも阿

奈悔しきかも足引の山子規空も登抒呂に誰かは音に啼かざらむ誰かは悲み歎かざらむ然はあれども是は固より人の力の得及ばぬ神の御業と今は其の息衝思ふ心を暫忍びて式の隨葬儀仕へ奉り今日はも御柩は舁上げて齋宮親族家族諸刺立つる旗手の列々に護り奉り送り奉らむと終祭仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食して玉鉾の道の長手を大船の由々久々

良々に退出で坐せと白す

同葬場祭詞

是の葬場に暫時舁据安め奉る贈權大講義堤清四郎大人の柩の前に大講義安部喜三郎拜み宣白さく阿波禮汝大人の爲に今日是の所にしも葬儀を行ひ御祭仕へ奉らむとは木綿襷掛ても思ひ渡らざりき阿波禮今此柩を奥城の底津岩根に埋めむと爲るにつけて都々久々と一世の

事を思ひ見れば其の心指す方は一道に有らねど加にも加久にも其の道の爲め其の業の爲に各程々に心を盡し思を惱し朝に勤み夕に勞きて且々に其功も現はえ其名も立ちぬと共に卽て年老い命の限の時到りぬるは現身の世の理にして如何にとも爲む術の無きこそ悲しき極にはありけれ故れ汝大人はも今其事の終りて一世の別の來にけるかと今更に心も亂れ涙も放れて留め難きを暫忍びて現世に坐しゝ間の功の條々を言擧稱へて偲び奉らむ汝大人はも去し明治十五年の頃しも今の平安教會長中野の教師より我道の教を傳へ聞き吉備國木綿崎山の麓在る大廣前に座す掛卷も畏き教祖の神の御前に參上り最厚き御教を蒙りしぞ我道に入給ふ端緒には有けるさて其の後彌益眞心を凝らし高き神德を蒙りて諸人に教傳へつゝあ

りし間に明治二十二年の三月に神道管長より教導職試補を授けられ又其の十九日には金光教會長より準七等脩信講師を申付られ斯くて其四月の中旬より難波教會所の廣前に請の隨勤務みましては晝となく夜となく信徒諸を教導き説諭し一向に大神に仕へ奉り給ひしかば其を賞給ふとして明治二十三年の十月には金光教會長より御紋附羽織地を授り給ひ明治二十四年の六月に此れの高宮の里に歸り坐して金光教會高宮支所を設立け遠近の人等を教へ導き説き諭して道の爲千々に八千々に御心を盡し給ひしかば教師の等級も次々に進みて明治三十一年の三月には神道管長より少講義に昇せ給ひ同じ三十二年の十二月には金光教會長より準五等脩信講師に進め給ひぬ又大人は

も公共の事業に志厚くして明治二十三年の三

月には彦根警察署及高宮分署新築費の内へ金若干を寄附せしに依り滋賀縣知事中井弘主より褒狀を授り給ひ同二十六年の十二月には岡山縣に洪水の溢れて貧しき民等の艱み苦みしを救ひ恤はさむとして金若干を寄贈りしに依り賞狀を賜はり又明治二十九年の十一月には神道本局新築費の内へ金若干を納めたるに依り神道管長より褒狀に添へて末廣を與へられ

同三十三年の十二月には高宮停車場道路新設費の内へ金若干を寄附せしにより滋賀縣知事河島醇主より褒狀を授り給ひ同三十年の六月には明治廿七八年の戰役につきて金若干を献しゝにより木盃壹個をぞ賜りたりける又今回我管長よりは汝大人が生涯を斯道の爲め眞心の只一筋に勤み坐しゝ功に依りて權大講義を贈り給ひぬ阿波禮汝大人はや世の爲め道の爲

立置き給ひし功績の多かれば我大神も深く厚く賞給ひ撫み給ひて高く尊き神位に上り教祖大神の廣き御蔭に隱ろひて安く樂しく長しへに鎭り給ひなむ然れば今ゆ後は幽冥より永き世の家の鎭と内外の患もなく守り給ひ幸へ給へと机代物を置足はし親族家族信徒諸び玉串の取々に拜み偶び奉らくを平らけく安らけく聞こし食して亡骸は今より埋め奉る隨奥城の底つ岩垣動きなく安く穩に鎭り坐せと白す

藤井岩野姫終祭詞

藤井岩野姫の柩の前に權少教正安部喜三郎白さく阿波禮汝姫はや思の外に身失せ坐しぬれば親族家族諸枕邊に打伏し脚邊に匍匐ひて哭き悲み亡骸をだに今暫時留め置まく欲りすれども世の慣と限し有れば今日葬儀として終祭仕へ奉り御酒御饌種々の味物を御前に置足は

し供へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食せと白す斯くて是より姫が入立ち坐さむ幽冥はしも我教祖の神の鎮り坐す所なれば只一途に伊行到りませ然到りましなば其の廣き御蔭に隱ろひ正しき神列に入り坐して永く久しく幸福を得給ひつゝ靈舍に鎮め奉りし汝が分靈と共に守護神と坐して家の内外に禍事なく子孫の八十續きに惠み幸へ給へ又出立せ坐さむ裝束物調ひぬれば奥城所に誘導き奉らむと仕へ奉らくを聞こし食し諾ひ坐して後も安けく出立ち坐せと白す

同葬場祭詞

此の葬場の四方四隅に齋竹樹て注連繩打廻らし其中央に柩を舁据安部喜三郎葬儀取總持ちて哀み偲びつゝも白さく阿波禮汝姫はも去し明治十八年の三月藤井廣武主の二女と生出で

坐して其の性質柔和に穏しく能く父母に孝順ひ成人り坐しては明治卅三年の四月吉備郡穂井田村に住める文箭富三郎主の長男新吉を迎へ妹背の中も最睦じく愛子をさへ産み坐しけるが如何なる神の御量にか去年五月の頃より無端病氣つきて太く苦しみ坐すとにはあらざりしかど月に日に異に衰へ行きて垂乳根の父母親族家族等の心盡しも其かひなく遂に幽冥に罷り坐しぬる事よ阿奈悲しきかも阿奈憂きかも親族家族諸は叫び咽び殆と絶入ぬべく惜しみ歎きつれど爭む術もなく留むる由もなければ例の隨葬具設整へ行隨の列は眞榊を彌先に持捧げ靑旗白旗刺立て柩の後先間もなく滿續け恙む事なく滯る事なく送奉る隨今よりは御骸の石隱り坐して容姿の見えずなりなむかく波加なくも成果ましぬれば言む術爲む術知

らに思詫て心も空に鬱悒手足疲憊げに逡巡ぬれど限なき事なれは机代物と御酒御饌種種を供置き各八十玉串を捧げ奉り永き世の別を告白さむ狀を聞受坐して今ゆ後親族家族諸ゞ參拜むべき此奥城の下津岩根に安く穩に鎭り坐せと白す

大岸幾志姫終祭詞

阿波禮大岸幾志姫の柩の前に權少教正安部喜三郎告白さく汝姫はも大岸銀藏主の長女に生出其性質柔和にして最穩しく幼時より能く父母に孝順ひ子たる者の道を違へず成人り坐しては家業を助けて怠る事なく殊に明治二十六年の六月に知々の實の父の大人ゞ病に依りて身退り坐しゝ後は專ら家督を總持ち彌益勵み勤み坐しゝが親族家族諸と入紐の同じ心に我教祖の御教を仰ぎ奉り廣く厚き恩賴を蒙りて

其商業の彌榮え行く隨棟門の高々に改築き家礎動ことなく固め給ひしは專汝姫の力にぞ有ける然るに今年九月三日卒然に病臥し坐ければ親族家族諸は一向に大神に乞祈奉り其處よ此處よと按摩りつゝ在りしが其は卽て流行病なりしかば今の規定に依り避病院に移し心盡して看護ひたりしも其かひなく遂に十月九日に三十九歳を現世の限として夕月の消ゆるが

如隱れ去坐しゝは惜しとも惜しく悲しとも悲しと云ふべし然れば亡骸は野邊の烟となし其が白骨を收め今日葬儀執行むとして御柩を舁出並立る旗手の列々に吹鳴す笛の調の擾なく御供の人々親族家族諸は行手の道も狹に並續けて守り送り仕へ奉らむとする狀を甘らに聞こし食し諸ひ坐して出ます道の長手を恙む事なく障る事なく御心も安けく出立ち坐せと白

す

同葬場祭詞

云へば息衝しく思へば涙ぐましき大岸幾志姫の柩の前に權少教正安部喜三郎告白さく汝姫は過にし九月の三日になも流行病に罹つらひ親族家族諸の心盡も其效驗なく遂に身失せ坐しければ亡骸は今の規定の隨加具土に任せて其の白骨を收め今日葬儀として種々の裝束物持連並め道の隈々恙む事なく滯る事なく送り參來て奥城の奥深く埋め奉らむと是の葬場に暫時舁据置きて御酒御饌種々の味物を捧け奉り親族家族諸悲しみ偲び拜み仕へ奉らくを平らけく聞こし食して是の奥城の底津岩根を常世の住所親族家族諸參拜むべき偲所と安く穩に鎭り座せと白す

久山氏妻今井末須姫葬場祭詞

阿波禮久山氏妻今井末須姫の御靈の前に金光教會特派講師安部喜三郎拜みて宣白さく汝姫はも去し弘化二年の二月十八日に此れの美作國大庭郡久世村に住める今井和惣兵衛主の四女と生出坐して其の性質柔和に穩しく幼稚より能く父母に孝順ひ成人り坐しては裁縫を始め總て女業には至らぬ事なく起居進退も優容に坐しゝが文久元年の秋此家に嫁ぎ久山猪八郎主の妻と成り給ひては平素に妹背の道に違ふ事なく操貞しく後ながらに家政を補翼け給ひ輔ひ給ひけるが如何なれば年經て後も御子なければ眞庭郡勝山村なる三村與治平主の二男德造を養ひ世繼と定め末を樂み賴みつゝ坐しけるを今年二月の中旬に夫の君とは顯幽と離れ隔り給ひ其後幾許もあらぬに汝も亦無端病の苦瀨に落ちて苦惱み坐しければ親族家族

は心を痛め思を焦し一向に大神に乞祈奉り醫師に請ひつゝ種々に心を盡しゝかど漸に羸弱坐して此れの明治二十八年の九月廿二日に五十歳を現世の限として入月の見えぬが如隱れ去坐しゝは最も哀しく最も惜しき事の極になむ斯く現世を離りて幽冥に罷坐しぬれば親族家族諸は殆と絶え入ぬべく呻吟ひぬれど現世の慣と定例あれば式の隨種々の葬具設整へ行

隨の列は青旗白旗を雲居遙に刺立柩の後先間もなく滿續け今しも道の隈々恙む事なく滯る事なく送り參來て此れの立石山の底津岩根の清々しき所を汝が御骸の鎭り所と奥城の奥深く埋め奉らむと仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食せと白す

斯て汝姫は現世に坐しゝ間慈善心厚くして貧困を惠み厄難を救ひし事も屢なれば其の御靈

は我大神の厚き御治を蒙り教祖の神の廣き御蔭に隱ろひ安く樂しく鎭り坐して家の靈舍に座す汝が分靈と力を協せ子孫の八十續きに守り給ひ惠み給へと御酒御饌種々の味物を供へ奉りて各偲の玉串捧げ奉り永き世の別を告白さむ狀を穩に聞こし食せと白す

大講義仁科松太郎大人葬場祭詞

是の葬場に暫時舁据安むる大講義仁科松太郎大人の棺の御前に少教正安部喜三郎告白さく阿波禮汝大人の柩を是の所に送り參來て今奥城の底津岩根に深く埋め奉らむとする此祭事や汝大人の現身の事の終り此の現世の永き別れの登遲米と親族家族を始め信徒諸も心々に過來し方を思出で忍び奉り惜み奉る事有るべし阿波禮汝大人の現世の身の終り一世の別の來にけるかと心も亂れ涙も放れて留め難きを

暫時忍びて汝大人の爲めに其の一世の間の功の條々を且々に言擧げ稱へて忍び奉らむ汝大人はも文久元年四月の頃たちちねの母刀自の病に拘らひ坐しければ其を治め癒さむとして我教祖の御教を蒙りしぞ我道に入り給ふ端緒には有ける然て後次々に廣く厚き御教に依りて彌眞心を凝らし益に道の眞を覺り得て此を己一人の御蔭にせむは最畏しと遠近の人等を

教へ導き說き諭しつゝある間に明治二十三年の九月に神道管長より教導職試補を授けられ明治二十八年の三月には權訓導に補せられ同三十一年の五月には訓導に進められ其の三十三年の六月に本教の別派獨立せし時は現級の儘本教教師に補せられ明治三十四年の十月に我管長より金光教今立小教會長を命じ給ひ次に教師の階級をも進められ同三十八年の九

月には大講義にこそは昇級せ給ひけれ斯く現世に坐しゝ程道の爲勤み仕へて功の顯はれ坐しゝかば教祖大神も廣く厚く賞給ひ惠み給ひて其の御許近く召上げ給ひ尊き神の位にも鎭り坐すらむ然神鎭り坐しなは靈舍に齋ひ奉りし汝が分靈と力を協せ親族家族信徒諸が家を身をも守り給ひ幸へ給へと御酒御饌種々の物供へ奉りて各偲の玉串捧げ奉りて永き世の別を告白さむ狀を聞こし食し諸ひ給ひて奥城の底津石垣動きなく安く穩に鎭り坐せと白す

岡本敬次郎童男葬場祭詞

是の葬場に昇据安むる岡本敬次郎童男の柩の前に中講義安部喜三郎白さく汝若子はも岡本萬治郎主の次男に生出ましける〻其の資性朴直にして賢く既に學校に入るべき時期にも近づきければ加り行く齡を樂み末頼母しく待ち

つゝ在りしに思ひきや今かく葬儀執行ひ舁据る柩の前に夏草の露の玉串捧け奉らむとは思も計らざりき返す返すも惜らしく悲しき事の極みなりけりかくて今道の隈々恙む事なく滯る事なく送り參來て是の所を奥城と底津岩根に深く堅く藏し奉り埋め奉らむとして御酒御饌種々の机代物を捧げ置き拜み奉る狀を聞こし食し諾ひ坐して遠永に安けく鎭り坐せと佐美太るゝ空の雨雲と心も搔くれて雨と降る袖の涙と拂ひつゝ悲み歎かひも白す

須々木健次郎彦葬場祭詞

此の葬場に舁据る須々木健次郎彦の柩の前に少教正安部喜三郎告白さく汝彦はも其性質素より深沈にして其の才も人に勝れ幼より學術を修め給ひて明治二十三年の十二月大庭郡役所より大庭高等小學校の教師を囑託され

教の鞭を取りつゝ在る間に岡山縣より訓導に任けられ彌生徒等を愛み教導き給ひしが思ふ所ありてにや明治二十六年の九月より鉄道の事に從ひ山陽に豐洲に九洲に將中國に其れ是れの會社に勤務み驛長に進み坐しては專ら其の職務に心を盡し許多の功績を顯はし給ひ然るを去年の十一月の頃より無端病氣つきて心地例ならず太く苦惱み坐すにはあらざりしかど月に日に異に衰へ行きければ親族家族諸は心を痛め胸を病み種々に思を凝らし伊可傳伊可傳今一度は美しき元つ御形をも見物語をも爲むものぞと乞祈仰ぎ待ちつるかひもなく何とかも惜らしき此世を背ひになして歸らぬ道には向ひ坐しけむ阿奈悲きかも阿奈悔しきかも親族家族諸は言む術爲む術も知らに憂ひ悲み悔み歎きつれど限ある人の力以ては止むる

由もなく爭む術もなければ今は其の御靈の行方を大神に乞祈奉り亡骸は式の隨廣く厚く治め奉り此奥城の奥深く埋め奉らむとして拜み奉る事の狀を靈ながらに平らけく聞こし食して是の所を常世の住所と安く穩に鎭り坐せと白す

陸軍歩兵少尉田副鎭助之君葬場祭詞

是の葬場に暫舁据安め奉る陸軍歩兵少尉從七位勳八等田副鎭助嚴功根之君の柩の御前に少教正安部喜三郎謹み敬ひも白さく汝君はや田副實主の眞名子にして幼少より雄々しく勇ましく常に軍人たらむ事をぞ志し給ひける故京都中學校の學業を卒へ給ひて明治十八年の二月陸軍教導團に入り十九年の六月其の歩兵科の業を卒へ陸軍歩兵二等軍曹に任けられ大阪鎭臺第十聯隊附となり其の七月には第二大隊

第一中隊半小隊長に廿七年の六月には陸軍歩兵曹長に廿八年の三月には陸軍歩兵特務曹長にまでぞ進み給ひけるかくて廿七八年の戰役には遼東半島に出征し後臺灣の守備となりて幾回となく危險を冒し困難を凌ぎて任の隨心を碎き力を盡し給ひければ廿九年の五月に廿七八年戰役の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章及年金參拾六圓を授け給ひ卅二年の三月

三十日には歩兵第十聯隊長より伎倆証明書をさへ受け給ひて其の四月一日豫備とは成り給ひぬ然れば其の七月退職恩給年額金百六拾八圓を授かり給ひ隊を除りし後は龍野中學校の教諭となり朝に異に子弟等を教へ正し導き諭し勤み勉め給ひしが卅四年十二月兵庫縣より其の勤勞を慰めて若干の金をぞ賜ひける斯くて去年の二月彼の露西亞に向ひて宣戰の大詔

を降し給ひしからに大御軍は日に異に競ひ進みて有りしが汝はも六月十三日召集れて第廿聯隊に入り給ひ七月一日神戸の港より軍立して大孤山に上陸し後は第二小隊長として柝木城を始め遼陽は云ふも更にて數回の戰闘に參加り大き功を立て十月の五日陸軍歩兵少尉に進み其の十二日には從七位に叙せられ給ひぬ然るに其夜はしも敵の根據地たる三塊石山に向ひて夜襲したるが汝は其の先鋒となり己が率ゐる兵士を指揮きて建びに建び進みに進みて戰ひ坐しゝ時しも雨と降りしき霰と迸しる敵の彈丸に中りて戰死を遂げ給ひしは哀しとも哀しく惜しとも惜しき事の極みなりけり然はあれども汝君が如何に雄ゝしく如何に勇しく立働きて武士の千代の鑑と高き勳功を顯はし給ひし狀況は第二中隊長より汝君の遺族に

告げ來し文書によりてこそ伺はるれ故れ今其一節を言擧して偲び奉らむ

去ル十二日午前十二時ヨリ我々中央軍ハ全軍夜襲ヲ企テ拂曉同山ノ麓ニ密集頑強ノ抵抗ヲナセル敵團ニ向テ肉薄シ突擊格鬪頗ル悲慘ノ狀況ヲ呈シ候加之我中隊ノミハ同山ノ麓ニアル三塊石山村ニ籠居セル敵兵ニ向ツテ肉薄セル事トテ爲ニ一場ノ市街戰ヲ演出シ強烈ナル猛射ヲ被リ中隊ハ爲ニ非常ノ多數損害ヲ被リ殆ト三分ノ一ニマデ減員致候テ我曹長以上ハ悉ク死傷セラレタルノ悲境ニ陷リ申候少尉殿ハ其中ニ立テ頗ル勇敢ニ其部下ヲ指揮督勵セラレ殆ント前進ニ艱ミツヽアル兵士ヲ叱咤シテ之レガ敵ノ群中ニ突入セラレ候其結果遂ニ多數ハ遁逃スルノ愉快ヲ見ルニ至リ申候夜漸ク明ケテ微カ

二人顔ヲ辨別スルノ際少尉殿ハ一彈ノ腹部ニ方ルモ屈セス尙前進ヲ續ケラレ候又モヤ一彈ノ飛來リテ胸部ヲ貫通セラレ殘念ノ一語ヲ殘シテ遂ニ勇敷戰死ヲ遂ケラレ申候誠ニ殘念ノ至リ御報申上候モ涙ノ種ニ有之申候而シテ少尉殿ノ勇敢ナル御働ニ依リ遂ニ中隊ハ此困難ナル市街戰ヲ遂行シ捕虜四拾六名內將校一名小生等ガ切リ伏セシ者十人內將校一人武器彈藥其他雜品ノ戰利品無數ニシテ爲メニ中隊ノ名譽ヲ博シタルハ全ク少尉殿ノ御働ニ依ルモノト深ク感謝致ス處ニ御坐候云々

斯く君の御爲國の御爲と誠意の唯一筋に力盡して顯はし坐しゝ其の御名は万代に朽ちす消えず其の忠魂は皇朝廷の大勅命以て靖國神社に國を守の神と合祀らせ給ふものぞ阿奈尊き

かも故れ今日はも葬儀執行ひ英靈を慰め奉ら
むとして種々の味物を御前に置足はして進め
奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諸ひ給
へと白す又汝ぢ戰友諸は尙次々に進みて今は
旅順口をさへに占領て更に奉天の府城をも陷
むと勇みに勇み建びと建びてある狀況をば汝
君も快しと見給ひ嬉しと思ほして御靈ながら
に天翔り國翔り導き助け守り幸へ給へと畏み
畏みも白す

陸軍歩兵軍曹富岡長造彦終祭詞

陸軍歩兵軍曹富岡長造彦の御靈の前に齋主少
教正安部喜三郎告白さく去年の二月に露西亞
との事起りてより陸に海に大御軍の競ひ進み
けるぢ中に汝彦はも四月二十四日を以て第十
師團に召集れ五月の十九日に神戸の港を出發
戰場に臨みてより以來戰へば勝ち攻れば取り

彌進みに進みつゝ坐しければ親族家族は云も更にて親しき朋友諸は如何で戰鬪に打勝ち皇大御國の大稜威を打輝し千名の五百名に稱はしき勳功を立て凱旋の聲勇しく歸り來坐さむ事をのみ樂みて夜晝知らに待兼て在りしに阿波禮十月十四日沙河の大會戰に敵の彈丸の中りて遂に草生屍と成果給ひしは口惜しき事の極にこそ然は謂へども軍人は戰場に君の御爲國の御爲と討死することこそ此上なき榮譽なりけれ斯れば汝が御心を凉しめ御靈を慰め奉らむとして今日しも葬具設調へ終祭と種々の味物供へ奉らくを聞こし食し給へと白す斯くて今より芥南尋常高等小學校の廣庭に導きて葬場祭仕へ奉り八軒屋の奥城所に埋めむと行手の道は靑旗白旗立連ね御尾前守りて人垣仕へ奉らむを穩に聞こし食せと白す

同　葬場祭詞

是の芥南尋常高等小學校の廣庭に暫舁据安め奉る陸軍歩兵軍曹富岡長造彦の柩の前に金光教少教正安部喜三郎謹み敬ひも白さく汝彦は明治十二年の五月六日と云ふ日に富岡兼造主の長男と生出で坐しけるが幼稚より學道に志厚く身は健全に成人坐して明治三十二年の十二月一日になる第十師團には入り給ひぬかくて温順に沈着たる資質なるからに常に上官の愛撫をも受け給ひし明治三十三年の六月には一等卒となり宮地中尉の從卒に擧げられ誠心の只一筋に勵み勤み坐して三十四年の十一月には上等兵に進み三十五年の二月には伍長に昇され其の十一月滿期となりては小野寺聯隊長より品行方正勤務勉勵學術技藝熟達の善行証書をさへ受け除隊の後は多良知根の父

母に孝養を盡し家の爲め一向に勤み勵み坐し
〻間に去年の二月十日露西亞に對ひて宣戰の
大詔を煥發給ひて皇軍の競ひ進みげる中に汝
は四月の廿四日豫備役を以て第十師團に召集
れ五月の十九日神戸の港より船出し其の二十
七日大孤山に上陸し後は岫巖を始め柝木城等
の戰鬪に參加りて大き功を顯はし八月の二十
五日軍曹にこそは進み給ひけれ斯くて十月十
四日沙河の大會戰に建び進みて醜の夷を打撥
ひ追退け功しく立働き給ふ時しも敵の彈丸に
中り重傷負ひ坐して終に身失坐しけるは最も
最も惜らしき事の極にこそ阿波禮今ゆ後永き
年月掛けて彌益名をも功をも高々に顯はし坐
さむものを然は有れども
大君の御楯我ぞと劍太刀身をも命をも惜まず
て顯はし給ひし香しき御名は後世に傳へ仰が

しめ其忠魂は皇朝廷の大敕命以て靖國神社に國を守の神と合祀らせ給ふものぞ阿奈尊きかも故れ今日はも葬儀執行ひ英靈を慰め奉らむと種々の御饗物を御前に置足はして進め奉らくを洗米の清らに美酒の甘らに餅飯の鏡明らけく聞こし食し諸ひ坐せと白す又汝ぢ戰友諸は尚次々に進みて己ぢ根據地と思ふぢ儘に築固め攻むることの難く落すことの能はぬ城壘ぞと言擧せし旅順口をさへに今は開城れ更に奉天の府城をも屠らむと勇みに勇み建びに建びてある狀況は汝彦も快しと見給ひ嬉しと思はして靈ながらに天翔り國翔り導き助け守り幸へ給へと畏み畏みも白す

陸軍砲兵助卒川上鉄太郎彦葬場祭詞

陸軍砲兵助卒川上鉄太郎彦の柩の前に齋主少教正安部喜三郎告白さく一度之れを射放てば

黒鉄の門扉も木葉と散り荒岩根の塞壘も轟に打頽すてふ大砲を思ふが儘に射放ち擊放つ砲兵計り雄々しく勇しき軍人は有らざるべし阿波禮汝彦が此砲兵の軍人として出征して戰地に到着し後は首山堡を始め遼陽は云ふも更にて數回の戰鬪に參加り大き功を立て給ひけるが三月十日奉天附近の大會戰に建び進みて攻戰ふ時しも雨と降りしき霰と逆しる敵の彈丸に中りて戰死を遂げ坐しゝは哀しとも哀しく惜しとも惜しき事の極みなりけり然はあれども大君の御楯我ぞと燒鎌の利心振起し身をも命をも惜まで如何に雄々しく如何に勇しく立働き功を顯はし給ひしか其の狀況は過にし三月の十七日第二中隊長原田大尉より汝彦の遺族に告來し文書によりて伺はるべければ今其が一節を言擧して偲び奉らむ

故陸軍砲兵助卒川上鉄太郎君ハ當隊ニ編入昨年十一月出征シ滿洲ノ泥濘なる荒原を跋渉シ頗ル困難ナル強行軍ヲ以テ海城ニ到着首山堡ニ遼陽ニ轉戰シ沙河會戰ニハ八家子ニ三家子ニ頑強ナル敵ヲ擊破シ今回ニ於ケル奉天附近ノ大海戰ニハ堅固ナル沙河ノ防禦線ヲ擊破シ進ンデ三月十日奉天東北方毛家屯ニテハ極メテ強大優勢ノ敵ト小銃火ヲ交ヘ終ニ肉薄セル敵ト白兵ヲ以テ格鬪スルニ至ル此際同君ハ勇戰激鬪中敵ノ小銃彈頭部ヲ貫通シテ遂ニ戰死セラル其壯烈ナル動作ハ偉大ナル勳功ヲ奏シタルモノナルヲ認メ感賞致居候實ニ哀惜ニ不堪候云々

かく君の御爲國の御爲と只一筋に誠心盡して顯はし坐しゝ其御名は万代に朽ちず消えず其忠魂は皇朝廷の大敕命以て靖國神社に國を守

の神と合祀らせ給ふものを阿奈尊きかも故れ
今日はも葬儀執行ひ英靈を慰め奉らむと種々
の御饗物を御前に置足はして進め奉らくを安
らに聞こし食し諾ひ給へと白す
辭別て白さく汝ぢ戰友諸は今尙次々に進みて
長春の堡壘を攻め吉林の城をも陷むと勇みに
勇みつゝぞありける又今回我聯合艦隊は敵の
第二第三艦隊を對馬の沖に邀擊ち或は之れを
擊沈め或は之れを捕獲て彼敵國ぢ賴に賴たり
し波羅的艦隊を全く擊滅しゝ狀は汝彥も快し
と見給ひ嬉しと思ほして靈ながらに天翔り國
翔り導き助け守り幸へ給へと白す

金光中學校教員山田友藏吊慰祭詞

此の教殿の奥床を假の靈舍と神籬立て招ぎ奉
り座せ奉る故金光中學校教員山田友藏主の御
靈の御前に齋主權少教正安部喜三郎謹みて告

白さく阿波禮忌々しきかも阿波禮悲しきかも
汝主はも其性質吳竹の直く忠實しく稚き時より學業に志厚くして初等の學校を修業め次々に進みて山口高等學校の學業を卒へし後は吳海軍造兵廠に仕へ又廣島明道中學校の教員となり明治三十四年の三月より此の金光中學校に教鞭執り坐しては生徒を愛む事生子の如く丁寧に教へ正し導き諭し給ひつゝ在る間に去

年の睦月には岡山なる片桐忠太郎主の長女を娶りて其の極月には愛子をさへ產せ給ひ彌益く其の職務にぞ心を盡し給ひける然るにいかなる禍神の禍事にか其頃より心地例ならずとて病床に打臥しゝが其下旬より岡山なる醫師の許に往到りて其を治癒めつゝあれば其効驗も顯はえて日々に怠り漸々に治りぬると傳へ聞きしを此の二月の十一日の朝未明より俄に重

り危篤れ未末遠き春秋を殘して曉告る鐘の音と消失せ坐しゝぞ最も最も悔しく惜しき事の極みなりける故れ今日しも金光中學校の教員を始めて生徒諸寄集ひ汝靈の御爲に弔慰祭仕へ奉り御酒御饌種々の味物を御前に置足はして玉串の取々に拜み奉らくを樂しとも嬉しとも聞こし食し諸ひ給へと謹み敬ひも白す

陸軍歩兵上等兵西牧善四郎葬祭弔詞

陸軍歩兵上等兵西牧善四郎君の柩の前に金光教少教正安部喜三郎謹み敬ひも白さく阿波禮今回の戰役はも我皇大御國の萬世の固に將東洋平和の基にと我皇軍人諸は大詔を背に負ひ持ち大稜威を頂に捧げ奉りて雄猛びに建びつつ攻闘ひ醜の軍を擊攘ひて連戰連勝天皇陛下の大稜威を天つ御空の彌高に皇御國の御光を潮の八百路の彌廣にい照り輝き渡ら

せ奉りし事よ阿奈雄々しきかも阿奈勇しきかも斯くて汝はも戰地に往き到りては數回の戰闘に參加り遂に遼陽の役にしも進み競ひ攻戰ふ途端に敵の彈丸に中り重傷を負ひ坐して遂に滿洲の野に草生屍と成果て給ひぬれば誰かは慕ひて悲まざらむ誰かは惜みて嘆かざらむ然はあれども我世に立て置き給ひし勳功は靖國の神床高く御名の譽は國の光と顯はれ給ひて武士の千代の龜鑑萬代に國を鎭護の神と仰がれ給はむものぞ阿奈尊きかも阿奈恐きかも故れ今日の葬場に吾輩も會集ひて其身失せ給ひし時の狀を偲び奉らくを天翔り國翔り寄り來て阿波禮と聞こし食し享け給へと白す

陸軍歩兵上等兵唐川德平葬祭吊詞

陸軍歩兵上等兵唐川德平君の柩の前に金光教少教正安部喜三郎白さく阿波禮去年の二月十

日彼露西亞に向ひ宣戰の大詔を降し給ひしよ
皇軍の向ふ所海に陸に戰へば必ず勝ち攻れば
悉く取り其の勝閧は世界に轟き渡り皇御國の
大稜威を打輝しつゝ彌進みに進みけるが中に
汝はも今年一月の二十八日黑溝臺附近の戰鬪
に參加り競ひ進み攻戰ふ時しも雨と降しき霰
と迸しる敵の砲丸に中りて重傷を負ひ遂に草
生屍と成果て坐しゝは哀しとも哀しく惜らし
とも惜らしき事の極みなり然はあれども斯く
君の御爲國の御爲と勇み進み攻戰ひて顯はし
ゝ其の御名は萬代に朽ちず消えず其の忠魂は
皇朝廷の大敕命以て靖國神社に國を守の神と
合祀らせ給ふものぞ阿奈尊きかも故れ今日の
葬場に吾輩も會集ひて其の身失せ給ひし時の
狀を偲び奉らくを平らけく開こし食し諾ひ坐
せと白す又汝が戰友諸は尙次々に進みて今は

奉天の府城を占領鉄嶺の堅き堡壘さへも陥れ
勇みに勇み建びに建びて進みつゝある狀況は
汝も快しと見給ひ嬉しと思はして靈ながらに
天翔り國翔り導き助け守り幸へ給へと白す

川之江教會長高橋常藏十日靈祭詞

是の小床に齋ひ奉り鎭め奉る權大講義高橋常
藏眞心岩根大人之靈神の前に金光教第一教區
支部々長少教正安部喜三郎告白さく昨日こそ
御病の狀變りぬと親族家族の心も窒に驚き惑
ひて若竹に吹く朝風の騷ぎ立ちしが昨日こそ
玉緒の緒絶えぬと信徒諸は爲む術知らに悲み
歎きて雲居行く山子規叫び哭きしが今日は早
や汝が幽冥に隱り坐しゝ其日より四日になり
ぬ親族家族信徒諸が朝夕の心寂しみ在しゝ世
を思ひ出でつゝ一向に戀ひ奉り偲び奉る心々
は日に添ひて繁る夏草彌深く川口に浸す朝潮

の彌益に忘るゝ術なく慰む方なく宇羅夫禮て
のみ在るものから取越えて十日祭仕へ奉るが
故に御酒御饌種々の味物を取揃へ御前に置足
はして捧け奉り玉串の取々に拜み仕へ奉る狀
を阿波禮とも嬉しとも諾ひ聞こし食して教祖
の神の御許近く仕へ奉らしつゝ豫て現世に座
しつる時の御心ながらに親族家族信徒諸を奴
婆玉の夜の守茜刺す日の守に守り惠み幸へ給
ひ又汝大人が立置給ひし此れの教會所の教務
は彌張りに張り彌榮えに榮え行くべく靈幸へ
給へと謹み敬ひ拜み奉らくと白す

土堂小教會長藤井吉兵衛大人十日祭墓參詞

此の榧木坂の奥城の底津岩根に石隱り鎭り坐
す大講義藤井吉兵衛大人の奥城の御前に權少
教正安部喜三郎拜み告白さく阿波禮昨日の葬
儀には知るも知らぬも刺立列ねし旗手の靡き

慕ひつゝ御柩を見送り奉り御供仕へ奉りぬ別きて年久に大人の深き厚き御教を蒙りし人々亦此の御葬の事を聞き愕き參來し信徒等は葬場も所狹きまで後れし漏れしとこそ參集ひ拜み奉りしが今日はも取越えて十日祭仕へ奉らむと藤井家の靈舍に齋ひ奉れる靈璽の御前を治め奉り已に其式竟へぬれば今かく親族家族信徒諸〻を率ゐ御前に連並め御酒御饌種々の物を捧げ置きて拜み奉らくを空つ御靈も阿奈嬉しと聞こし食し諸ひ給へと白す

贈訓導長田眞幸彦三十日靈祭詞

此の小床を假の靈舍と注連引延へ神籬立て招ぎ奉り座せ奉る贈訓導長田眞幸彦之靈神の前に少教正安部喜三郎拜み告白さく冬籠春去り來れば咲ざりし花も且咲き萌ざりし野邊の草木も萌出なむ其の花も後は移ろひ其の草木も

遂に枯れては其の根に還る慣なれば尚我大神の御靈を享け得て長き短き其一世の限は世の爲家の爲程々に盡すぞ人の世の定めなりける思へば悲しく言へば悔しき汝彦はも此現世の人とあるべき世の程を盡しもあへず末遠き春秋を遺して波加なく身失せ給ひけり阿波禮花ならば亦來む年を待て在らむ草木ならば亦來む春を賴みて在らむ二世と往かぬ人の身の一世をだに全く竟へずして退坐しけるは惜しと云ふにも心餘り悲しと云ふにも詞足らず只阿波禮と長息のみぞせらるゝ然れば如何で御靈をも鎭め奉り如何で御心をも慰め奉らむと花も咲き草木も萌えむ此頃の春も尚長閑ならぬ間に今日はも已に卅日と云ふ日になりぬれば其の御祭仕へ奉らむとして奉る禮代は御酒に御饌に海川山野の味物を置足はし擎げ奉らくを平

らけく安らけく聞こし食し給ひて現世に殘れる親族家族諸を守り給ひ幸へ給へと敬ひ拜みも白す

新見教會長三宅信吉彦五十日靈祭詞

是の神床に齋ひ鎭め奉る贈權中講義三宅信吉道興根彦之靈神の前に白さく阿波禮汝彦の現身の世を退り坐しゝより來經行く月日躊躇ふ事なく十日二十日は昔と過ぎ三十日四十日は昨日と避りて今日は早五十日と云ふ日に成りぬれば式の隨御祭仕へ奉る禮自の物と御酒御饌を始めて種々の味物を御前に置足はし捧げ奉らくを平らけく聞こし食せと白す斯く仕へ奉れば汝彦ぱも本教の教師となりまして明治三十一年の六月此れの教會所を設立ては平常に身を清淨にし心を誠にし一向に大神に仕へ奉り信徒諸を教導き說諭し道の爲許多の功

を立置き給ひしかは我大神の廣き御惠に其の本つ御靈は教祖の大神の御許近く侍ひ坐しつつも此靈璽に留り給ひ鎭り坐せる靈は遠永き家の守神と爲り給ひ將信徒諸の行末幸く守り惠み導き給ひて此れの教會所の教務を往先かけて彌榮えに榮え行くべく靈幸へ給へと乞祈奉る事の由を平らけく安らけく聞こし食し諸ひ給ひ御心穩に鎭り坐せと白す

大倉和平太百日靈祭詞

是の小床に鎭め奉り座せ奉る大倉和平太若子之靈神の前に少教正安部喜三郎告白さく阿波禮月日の過行く狀は此家の後を流るゝ西川の朝夕に淀むともなき事の如く此家の門前を行交ふ市人の足も停めぬ事の如く夏衣涼しと思ひて夕風は木枯の身に染む音と吹變り秋萩の花に愛つる朝露も初霜の寂しき色に置替る其

白妙の袖打垂れて五十日の御祭執行ひしも只此頃の心地せらるゝに甚早くも今日百日祭となりぬれば御饌に御酒に種々の味物を御前に置足はして親族家族の彌列々に並居續き玉串の取々に拜み奉る事の狀を嬉しとも樂しとも聞こし食し諾ひ坐せと白す

祭詞雜稿上終

明治四十二年九月三十日印刷
明治四十二年十月五日發行

編輯兼發行者　岡山縣淺口郡三和村大字大谷三百三十二番第二地　安部喜三郎

印刷者　岡山縣岡山市船頭町三十七番地　安井宇吉

印刷所　岡山縣岡山市大字西中山下百五十四番地　山陽活版所

255 288